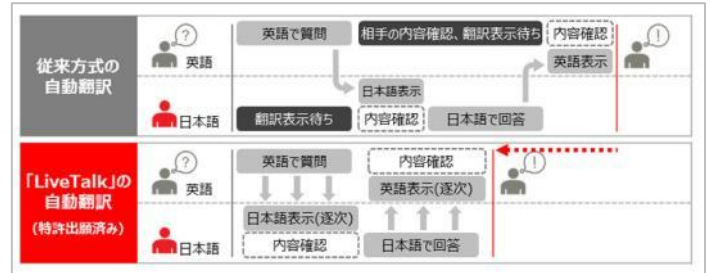


# 多言語対応推進フォーラムの舞台裏 ～リアルタイム翻訳字幕LiveTalk～

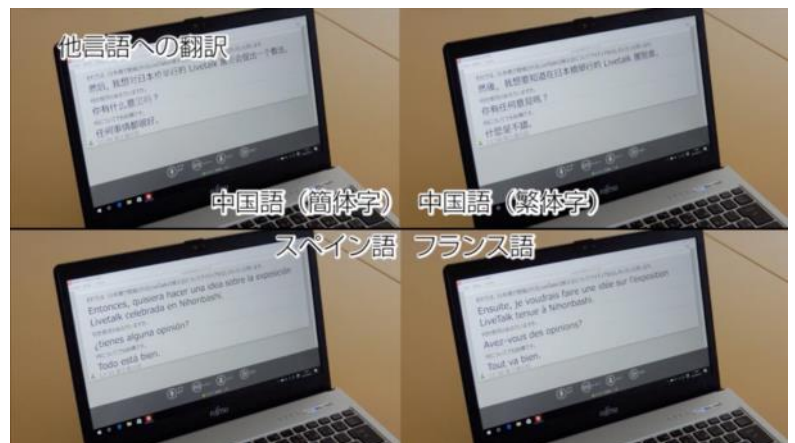
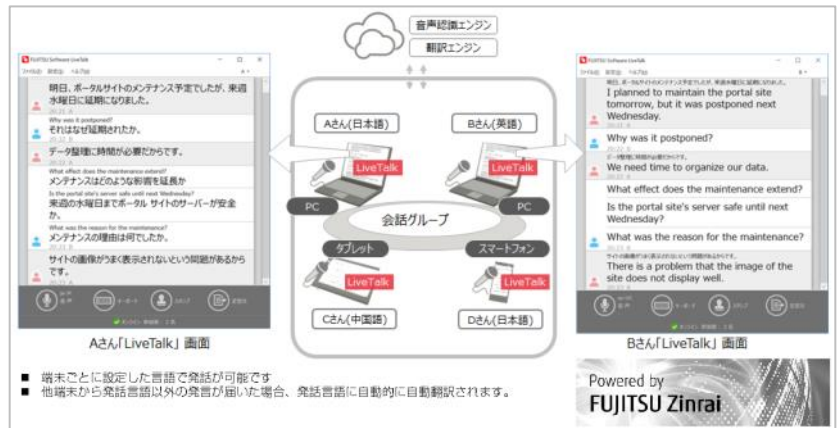
株式会社富士通ソーシャルサイエンスラボラトリ LiveTalk 開発担当事業部 福岡寿和

令和2年12月23日、一年延期となった2020年オリンピック・パラリンピック大会の開催を見据え、withコロナ時代の多言語対応の取組を紹介するため、「多言語対応推進フォーラム」が開催されました。フォーラムでは登壇者の発言をリアルタイムで日本語から英語に翻訳し、配信画面へと字幕を表示する「リアルタイム翻訳字幕」技術が4社で分担して運用されました。

富士通株式会社では、基調講演の時間帯に、リアルタイム翻訳を行うダイバーシティ・コミュニケーションツール「FUJITSU Software LiveTalk」技術を披露しました。



LiveTalkの開発を行っている株式会社富士通ソーシャルサイエンスラボラトリの福岡氏は、「LiveTalk」がICTを活用した新たなコミュニケーションツールとしての可能性を示し、今回のフォーラムでは、発言者の音声を認識して即座に翻訳・テキスト変換するという「LiveTalk」のリアルタイム翻訳技術の特徴がよく出たと評価する一方で、外国人話者が日本語を話す場合に日本語のスキルがどの程度で、どのような話し方をする方なのかを事前に把握ができない場合の課題を述べました。



「LiveTalk」は、AI搭載音声認識とリアルタイムテキスト表示技術によって、発話内容を共有するコミュニケーションツールです。富士通独自の技術により、翻訳された内容を発話途中でも次々に表示することで、通常の会話のようなテンポの良いコミュニケーションが可能になります（国内・海外特許出願済）。また、発話内容は、端末ごとに設定した言語で表示できるため、日本語と英語、中国語といった複数言語でのリアルタイムな情報共有も可能になります。こうした特徴を活かし、「LiveTalk」は多言語会議の議事録作成用の支援ツールとしても使用することができ、また聴覚障がい者とのコミュニケーションにも活用することができます。

「多言語対応推進フォーラム」では、早口で話す登壇者のスピードにも、最小の遅れで反応して翻訳を表示し、特許技術であるリアルタイム翻訳技術の特徴を最大限に発揮することができました。

一方で、業界用語や略称などの独特の言い回しがある場合には、事前にAIに教えておく必要があります。

今回は当日まで登壇者がどのような内容の話をするのか具体的に把握できなかったため、事前準備が十分にできませんでした。また、基調講演に登壇されたダイアン吉日氏は、英国人であり、英単語をカタカナ発音ではなくネイティブ発音されていたので、AIが音声認識できない部分もありました。このことから、「今回は、事前のAI学習が不十分であり、初めて聞く日本語のように誤認識する場面もあった。また、日本語とネイティブ英語発音が混じりあうようなハイブリッド言語トークへの対応の必要性を感じた。」と福岡氏は話しました。



上記のような課題があり、翻訳精度を十分に上げることは叶いませんでしたが、動作面では、登壇者の表情やジェスチャーと、タイムラグの少ない速度で動作することができた点は収穫と言えるでしょう。

福岡氏は最後に、「今後も、通訳を同席しての海外での現地打ち合わせは困難な状況が続くと予想されます。」と話し、「WEB配信によるリモート参加が今後のスタンダードになることで、「LiveTalk」の自動翻訳・議事録作成支援の機能強化を継続して実施したい。」と述べました。

(令和3年2月作成)

※フォーラムの様子は、こちらのURLからご覧いただけます👉<https://tokyodouga.jp/nf68gam9q1a.html>